

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370090

研究課題名(和文)加藤周一の思想史研究 手稿ノートの分析を中心に

研究課題名(英文)The research of the thought of Kato Shuichi through his manuscripts

研究代表者

鷲巣 力(Tsutomu, WASHIZU)

立命館大学・衣笠総合研究機構・教授

研究者番号：30712210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、戦後日本を代表する国際的知識人加藤周一の「知の世界」を解明することであり、21世紀の国際化時代を生きる日本の知識人の生きる指針を学び取ることにあった。その基礎作業として、加藤の著作を精読すること続け、加藤が遺した膨大な「手稿ノート」を読むこととした。そして加藤の思想と行動の原点と考えられる戦時中に書かれた8冊のノートを「これを「青春ノート」と名づけたがデジタルアーカイブ化して公開した。そして蔵書の整理を図書館の協力のもとに進め、立命館大学図書館内に「加藤周一文庫」として開設させた。これによって学外の研究者のみならず、一般市民が利用できることとなったのは大きな成果である。

研究成果の概要(英文)：We have been studying about “the world of knowledge” of Shuichi KATO, who is one of the greatest international intellectuals of Japan after WW2, for learning a guiding principle for life of Japanese intellectuals in globalized era. Our basic work is intensive reading KATO’s writings, especially enormous volume of handwritten documents. We digitalized and released the selected 8 notebooks written during wartime. Those notebooks are supposed to be the origin of KATO’s thoughts and actions and we call them “the notebooks of youth”. We continued to organize KATO’s works with the cooperation of the library of Ritsumeikan University and opened “Shuichi KATO’s collection” in April, 2016. That is a big achievement because not only researchers of other institutes but also general citizens can use it.

研究分野：戦後日本思想史

キーワード：戦後日本思想 日本文学史 戦争 知識人 手稿ノート デジタルアーカイブ 青春ノート

1. 研究開始当初の背景

(1) 2008年12月、戦後日本を代表する国際的知識人加藤周一(1919-2008)が亡くなった。加藤は1988年から2000年まで立命館大学国際関係学部の客員教授を務め、1992年には立命館大学国際平和博物館の初代館長に就いた。加藤と立命館大学とのこのような関係を尊重して、加藤の遺族は、加藤が遺した約2万冊に及ぶ蔵書、1万頁を超える「手稿ノート」、そして来信、手帳、写真、新聞切り抜きなどの膨大な資料類を、2010年に立命館大学図書館に寄贈する意思を明らかにし、立命館大学はこれを受け入れた。

立命館大学図書館は、寄贈された蔵書、手稿ノート、資料類を、整理したうえで、研究者に供するだけでなく、広く市民に公開することによって、これらが社会的財産として利用されることを望んだ。これは加藤の遺族の希望でもあったが、このような方針に基づき「加藤周一文庫」を創設することで、大学における個人文庫の新しいあり方を打ち立てることを意図したのである。かくして2011年4月から蔵書の整理作業、手稿ノートのデータベース化作業が図書館を中心に始まる。

(2) 上記の作業を進める過程で、加藤の遺した蔵書や「手稿ノート」がきわめて貴重な研究資料であることを認識し、これらを使った加藤研究、さらに戦後日本思想研究を進める必要を痛感した。

しかしながら、国際的評価が高かったにもかかわらず、国内の研究者たちの加藤に対する評価は必ずしも高いものではなかった。その理由はいくつか考えられるが、加藤のあまりの博覧強記に多くの研究者の理解が及ばず、しかも加藤が採った研究方法は日本の学問研究の方法とは大いに異なっていたことが主たる理由だろう。すなわち、加藤の研究方法はたえず全体的かつ総合的理解を目指す、日本の学問研究は専門分化が進み、細部に対する強いこだわりの傾向が見られる。

加藤の著書は海外で翻訳されることが多く、のべ50冊に及ぶ翻訳本が刊行され、加藤の主著である『日本文学史序説』は七ヶ国語に翻訳され、海外の日本文化研究者にとっての重要な参考文献とされている。

このことを鑑みれば、日本の研究者に「国際性」が求められる時代にあって、国際的な評価を得ていた加藤の思想と行動を研究することで、日本の研究者あるいは知識人が進むべき方向性について、示唆を受けることが多いと違いないと考えた。

(3) 加藤周一が遺した貴重な根本資料を受け入れた立命館大学は、加藤研究を進めることにおいて優位な位置を占めている。同時に加藤研究を進めることは、立命館大学に課せられた社会的責務であると認識する。このような位置づけのもと2014年に「加藤研究会」を立ち上げ、2015年には「加藤周一現代思想研究センター」を発足させ、本研究センターを基盤に加藤研究を進め、今日に及ぶ。

2. 研究の目的

(1) 丸山眞男や大江健三郎がいうように、加藤周一研究を単独で行なうことはむづかしい。長い時間と多数の研究者とともに進められることが望ましいと考え、本研究を本格的加藤周一研究の第一段階として位置づけ、数名の学内研究者によって発足させた。

本研究の目的として、戦後日本を代表する国際的知識人加藤周一の「知の世界」がいかに形成されたかを解き、いかなる特徴をもっているかを明らかにすること、そして加藤に関する理解を社会的にも発信していくことをめざした。より具体的に言えば以下の四つの目的を設けたのである。

加藤が遺した多数の著作と膨大な「手稿ノート」を読むことを中心に、加藤の「知の世界」の形成をあとづけること。

加藤の遺した「手稿ノート」のデータベースをつくり、さらにデジタルアーカイブ化して公開することによって、これを誰もが利用できる社会的財産とすることである。1万頁を超える手稿ノートのすべてをデジタルアーカイブ化することは困難であるが、まずは加藤が17歳から22歳にかけて綴った8冊のノート(これを「青春ノート」と名づけた)をデジタルアーカイブ化すること。

同時代の日本の思想家 林達夫、丸山眞男、鶴見俊輔、山口昌男、多田道太郎らと比較しながら、戦後日本思想史のなかに加藤を正当に位置づけること。

2016年4月の立命館大学平井嘉一郎記念図書館の開設に合わせ、「加藤周一文庫」を創設し、創設記念の講演会を開くことをはじめとして、加藤周一研究の意義と加藤周一文庫の存在について社会的発信を行なうこと。

(2) 第1の目的に即せば、加藤は「国際的知識人」であるが、それはたんに世界各地の20あまりの大学で教鞭を執ったということや、英語、ドイツ語、フランス語を自由に操ったということにとどまらない。加藤の思考や言説が、国際的にも評価されていたということの意味する。実際、加藤のいくつかの著作は海外の日本研究者の必読文献となっている。その理由はどこにあるのだろうかという問題も興味深い考察対象となる。

われわれが主題として定めた加藤の「知の世界」には、いくつかの特徴が認められる。この特徴を踏まえて研究は進めなければならない。その特徴とは何か。

ひとつは、考察の対象がきわめて多岐にわたることである。文学や美術はいうに及ばず、映画・演劇から、思想・哲学まで、人文・社会科学から自然科学まで、東洋から西洋まで、古代から今日までを対象に据える。しかも、ときどきの政治状況がたえず意識され、社会的な発言を繰り広げてきたことである。

ひとつは、和漢洋の該博な知識を基盤にして、通時的理解に共時的理解が重ねられていることである。その歴史的にして比較文化論的視野のもとに、古今東西のさまざまな事

象が捉えられることである。

もうひとつは、考察の対象に対してたえず全体的総合的理解を指向していることである。したがって芸術を論じながら政治が語られ、日本を語りながら西洋が述べられ、文学を述べながら自然科学に及ぶ。狭い専門領域に閉じこもらずに、専門の垣根を容易に飛び越えて考察することになる。

こうした特徴を持つ加藤の「知の世界」を理解することは誰にとっても容易なことではない。あまりの博覧強記と合理的思惟に辟易として、加藤に対する毛嫌いあるいは食わず嫌いに陥る。それどころか、ひとりの人間ができる範囲を超えていると考え、加藤はいい加減にものを言っているのではないか、半可通ではないか、という反応さえ見られる。かくして専門研究者のあいだでは加藤はあまり研究対象とされてこなかった。

実際、これまで加藤に関する研究は多くはない。わずかに本研究の研究代表者であり、加藤の著作集、自選集の編集に携わった鷺巣研究員による『加藤周一を読む』(岩波書店、2011年)および『「加藤周一」という生き方』(筑摩書房、2012年)、それにフランス文学研究者の海老坂武の『加藤周一』(岩波新書、2013年)があるに過ぎなかった。なお、研究期間中に成田龍一『加藤周一を記憶する』(講談社新書、2015)が刊行された。

一方、海外に目を転じれば、加藤の著作のうち『日本文学史序説』や『芸術論集』や『羊の歌』などは数カ国語に翻訳されて、海外の日本研究者たち、あるいは日本文化に関心を寄せる読者たちの重要な参考文献となっている。つまり、加藤の思考や言説は、海外では普通のある考え方であり、日本では普通ではないことを意味する。なぜこのような違いが生じるのかという問題も重要な問題となる。

(3)第2の目的に即せば、加藤に関心を寄せるのは研究者たちよりむしろ、市民にも広がる。そのことを考慮すれば、閲覧者が直接に手に触れることができない「手稿ノート」のデータベース化、デジタルアーカイブ化による公開が必要になるのである。

(4)第3の目的である戦後日本思想史の位置づけに即していえば、まずは林達夫と丸山眞男というふたりの思想家の戦中から戦後にかけての思想と行動と、加藤のそれとを比較する研究が必要となると考えた。

幸いにして、加藤が遺した、蔵書、手稿ノート、資料類を立命館大学図書館は所蔵している。立命館大学は加藤研究を進めるという点において優位な立場にあり、これらを活用しながら日本の戦後思想史研究に新たな光を投げたいという目論見もあった。

(5)同時に、第4の目的にも関わらず、講演会や刊行物を通して、加藤の思想と行動を広く伝えることがなければ、研究は市民から遊離したものに終わる。次代の人びとにつなげるために、社会的発信を行なうことも本研究の重要な責務であると認識した。

3. 研究の方法

(1)加藤周一の「知の世界」を解明するには、加藤が遺した著作、手稿ノートを読み込むことから始まる。とりわけ加藤の半生記とされる『羊の歌』を読むことは必要不可欠にして第一歩の作業である。その作業を通して、加藤の歩んだ道が追体験され、加藤の思想と行動を把握することになるに違いない。

加藤の著作を読むにあたって注意すべきは、加藤の著作は状況の関数であり、日付をもっている。つまり、ジャーナリスティックな問題意識をいつも失っていない。どんな著作も状況とのかかわりで書かれる。したがって、加藤の著作は状況との関係で読み解く必要があることである。

(2)加藤の思想と行動を理解するには、加藤の著作や手稿ノートを読むだけでは足りない。戦中・戦後の知識人 林達夫、渡辺一夫、丸山眞男、森有正、鶴見俊輔、竹内好、多田道太郎、山口昌男らの思想と行動と、加藤の思想と行動とを比較し、加藤の思考や論理の特質をつかむことが求められる。

加藤の文体を分析することを通して、加藤の思考や論理の特質を浮かび上がらせる必要もある。なぜならば、文体とは思考が形となって表れたものだからである。

さらに加藤に関する批評、評論を集めて、加藤がいかに理解され、いかに誤解されていたかを理解することも必要になるだろう。

(3)加藤の「知の世界」を解明するには、まず加藤の「三つの出発」を把握し理解しなければならぬ。

第一の出発は戦時中の体験である。すなわち「戦争体験」。これが加藤の原点である。第二の出発は1951年から1955年にかけての「フランス留学」である。文学史研究の方法を再確認し、日本文化を「雑種文化」として捉えた契機になる留学である。

フランス留学の成果はフランス知識人に出会ったこと、とりわけジャン＝ポール・サルトルと出会ったことが大きい。これによって知識人のあり方について深く考えることになる。したがって、加藤がサルトル、カミュなどのフランス知識人から何を学んだかを理解することが不可欠の方法となる。

この二つの出発の上に第三の出発「ブリテイツシュ・コロンビア大学(UBC)における教育研究生活」が用意される。加藤自身が「蓄積の時代」と呼んだ10年間であり、日本文学史研究や日本美術史研究を進めた時代である。

この10年間の「蓄積」が代表作『日本文学史序説』(筑摩書房、上巻1975、下巻1980)および『日本 その心とかたち』(平凡社、第1巻～第5巻1987、第6巻～第10巻1988)に結実したといえる。そして集大成としての『日本文化における時間と空間』(岩波書店、2007)が著される。この代表作を精読することによって、加藤の思考の特徴、さらには国際的に評価される理由が明らかになる。

4. 研究成果

(1) 本研究の第1の目的に関わる作業として、加藤が著した半生記『羊の歌』『続羊の歌』(岩波新書、1968)を精読することから始めた。加藤研究会(2014年5月)における小関研究員、鷺巣研究員の報告、それに基づく質疑、討論を行ない、各研究員の問題意識を確認し、問題意識の共有を図った。

上記二書を精読することを通して明らかになったことは、通説とは大いに違って、加藤は早くから日本文化(文学・美術が中心)を研究対象としていたことである。フランス留学は加藤にとってきわめて大きな影響を与えた。留学目的は表向き医学研究であったが、もとより医学を学ぶ意思はなく、フランス文学、フランス文化を本格的に学ぶことさえ目的としていなかった。加藤の留学目的は、日本文化を考察するためのもうひとつの座標軸を獲得することにあった。その点でヨーロッパの「中世」が今日に繋がっているということを発見したことは、加藤にとって限りなく大きな意味をもっていた。

フランスで「中世」が今日に繋がっていることを知ったことで、日本文化は雑種文化であるという特質(戦後日本思想史研究では避けて通ることのできない一連の「雑種文化論」で考察した)を把握し、雑種文化を肯定的に評価した。さらにフランスでは広義の文学概念をもって日本文学史を理解する方法を会得したというよりも、むしろ再確認した。

加藤にとってフランス文化研究は重要な位置を占めるが、加國協力研究員の報告「加藤周一とサルトル 日本におけるサルトル思想受容史の一事例として」(2015年12月)は、加藤の全体へ向かう志向がサルトルからの影響であることを論じた。

また研究会に招聘した岩津航(金沢大学准教授)は「加藤周一とフランス文学史」と題した報告(2016年12月)で、加藤の『日本文学史序説』がフランス文学史研究に深く負っていると指摘した。観点からの『日本文学史序説』に関するこのような分析はなかった。

加藤は敗戦直後に被爆地広島に入って、被爆実態調査と診療活動に従った。それは加藤にとっては重たい経験で、その後長く広島について語ることはなかった。『羊の歌』『広島』の章で触れるが、そこで被爆について明確な意見を述べたわけではなかった。オーストリアのジャーナリスト、ユードイト・ブランドナーが2004年に東京でインタビューを行なったが、そのインタビューでは、加藤は日本の戦争責任問題と戦争被害問題とを重ね合わせて「広島」について語った。半田協力研究員は、ウィーンで同氏に取材し、加藤のインタビューの内容について研究会(2017年3月)で精しく報告した。加藤が医業を廃することになる理由のひとつは、広島での経験、すなわち医者と被爆者とのあいだに埋めがたい距離がある現実に、医学の無力を悟ったことにあるように思われる。

広島の問題を加藤との関係に限定することなく、戦後日本の言論の問題としてまで広げて理解しようとしたのが、福間研究員の「慰霊祭の言説空間と「広島」:「無難さ」の政治学」(『現代思想』、「主な発表論文」参照)である。

加藤の著作活動をはじめとする知識人としての活動の原点は、「戦時下の戦争体験」にあるだけではなく、「敗戦後の戦争体験」に根ざしていることも『羊の歌』『続羊の歌』を読むことで了解できた。これもまたこれまで言われることがなかった新たな発見である。すなわち、知識人、大衆を問わず、日本人のものの考え方に超越的思考がなく、時間的に言えば「いま」の重視、空間的に言えば「ここ」の重視。これを加藤は「いまここ主義」が強くあると指摘するが、加藤はこれを早い段階からつかんでいたのである。

加藤はしばしば冷徹な合理主義者と評価されるが、その理解もはなはだ一面的であり、『羊の歌』からも読み取ることができ、遺された「手稿ノート」からも確認できるが、激しい情熱の持ち主であり、その情熱は学問研究のみならず、性愛にも向かっていたことが感得できる。これもまた学問的レヴェルで明らかにされたことはなかった。

なお『羊の歌』『続羊の歌』を精しく読む作業は鷺巣研究員が進め、『羊の歌』を精読する』(上下二巻、岩波書店、2018)としてまとめられる予定である(書き下ろし原稿はすでに完成しているが、2018年「岩波新書刊行80年」および『羊の歌』刊行50年」にあたり、その記念企画として出版したいという書店の要望があり、刊行が延びている)。

(2) 本研究の第2の目的にかかわる作業として、1万頁を超える「手稿ノート」は、半分強が加藤によって主題別にファイリングされ、半分弱は未整理状態にあった。したがって、まずは整理されたファイルにしたがって、あるいは新たにファイルを作りながら、データベースをつくることを進めた。これによって、手稿ノートの概要を把握することが可能となった。

「手稿ノート」には、加藤が17歳から22歳にかけて綴った8冊のノートがあり、これを「青春ノート」と名づけて、デジタルアーカイブ化作業を進めた。デジタルアーカイブ化の作業は、たんにノートを映像で見せ、これを縮小拡大して見ることができただけではなく、ノートの全体から「キーワード」を抽出し、キーワード検索ができるシステムとして構築した。これは今後のデジタルアーカイブ化を進める基本的方法となるだろう。

「青春ノート」は、A D E A Cのプラットフォームに搭載されたので、同じプラットフォームに載る他のデジタルアーカイブとも連携して検索できることになる。これによって、世界のどこからでも、世界の誰でもが、インターネットを通して「青春ノート」を読

み、かつ見ることができるようになった。

一方、インターネットになじまない人がいることも事実であり、そういう人たちのために『青春ノート(抄録)』を人文書院から刊行することが決まり、目下、編集作業を進めている(2018年刊行予定)。

小関研究員の研究会報告(2014年5月)は、加藤の著作を読み込み、「青春ノート」を精読することを通してなされた。その後本学の土曜講座における「詩的言語と性愛のコスモポリタリズム」(2016年5月)を経て、さらにブラッシュアップされ「加藤周一の精神史

性愛、詩的言語とデモクラシー」(『立命館大学人文科学研究所紀要』、2017、「主な発表論文等」参照)として発表された。この論考は加藤のまったく私的な「性愛」の問題と、公的な主張である「デモクラシー」の問題と、そのふたつを表現する「詩的言語」の問題を、相互に関連させて論じたものである。すなわち、加藤の思想と行動の核となる三つの問題を取り上げ、加藤を全体的、総合的に理解しようとした意欲的な論考であった。

本研究では加藤が綴った「青春ノート」のデジタルアーカイブ化を成し遂げたが、今後も引き続いて加藤の「手稿ノート」をデジタルアーカイブ化して公開する予定である。その作業の準備として「デジタルアーカイブ」の現状と将来の可能性について、湯浅協力研究員が報告を行なった(2016年9月)。

(3)本研究の第3の目的にかかわって、戦後思想史のなかに加藤を位置づけると、啓蒙思想家としての活動を見落とすことはできない。加藤の言論活動がそもそも啓蒙思想家としてなされていると考えるが、それがもっとも先鋭的に現われたのは百科事典編集長としての活動であろう。そこで、平凡社の大百科事典の編集長として何をしたかを、平凡社編集局長を務め、加藤の片腕として百科事典を編集した龍澤武に研究会(2015年10月)に参加してもらった。龍澤の見解によれば、加藤の編集長としての仕事は、遠くフランスの百科全書派の思想に胚胎していると同時に、1970年代以降の日本の学問の過渡期にあって、地域主義を中心にした学際的な新しい観点で編集を進めたという。これは加藤の思想の核心部分でもあるだろう。

戦後思想史の啓蒙思想家という点では、林達夫も丸山眞男も共通する。林と加藤は百科事典の編集長、合理主義的思考、時代の趨勢に阿ることなく少数派を貫いた点でも共通する。二人の思想家の時代との対峙の方法は、現代を生きるわれわれにも示唆に富むものである。加藤と林を比較しつつ理解しようと、鷺巣研究員は「林達夫への精神史的逍遙」(『イタリア図書』、「主な発表論文等」参照)の連載を始めた。

丸山眞男と加藤も共通する。それは戦争体験を経るなかで抱いた「日本人のものの考え方とはいかなるものか」という問題意識と、

日本思想を古来の「古層」(丸山)あるいは「土着的世界観」(加藤)と外来思想の接触の問題として日本思想を分析しようとした学問的方法である。そして丸山と加藤は個人的にも深い信頼関係によって結ばれており、東京女子大学の丸山眞男文庫には、26通の丸山宛の加藤書簡が所蔵され、「丸山眞男記念比較思想研究センター報告」に翻刻されたが、その書簡に関する註釈を鷺巣研究員が著した(2017年3月、「主な論文発表等」参照)。

加藤の知識人としての行動を戦後思想史のなかで位置づけようとしたのが根津研究員であり、その研究成果は『戦後知識人と民衆観』『戦後日本思想と知識人』『メディアリテラシーの諸相』(ともに「主な発表論文等」参照)として結実した。

加藤の表現方法を問題にしたのが彭佳紅協力研究員と桜井均協力研究員の研究会報告(前者は2015年6月、後者は2016年2月)であった。彭は、加藤の漢詩を題材にして加藤の文体を分析し、桜井は加藤が出演したTV番組における話し言葉を分析した。書き言葉にせよ、話し言葉にせよ、加藤はたえず読み手、聞き手を意識していることが報告された。それは啓蒙思想家として戦後民主主義を擁護する立場に繋がる態度であるだろう。

(4)本研究の第4の目的にかかわって、2016年5月に加藤周一文庫開設記念講演会を開いた。講演者に、大江健三郎、ソーニャ・カトー(加藤の息女)、ソーニャ・アンツェンを招いた。

大江健三郎は、加藤の言論活動の出発点に書かれた「天皇制を論ず」(『大學新聞』1946年)を取りあげ、加藤が一貫して反戦の立場、憲法9条擁護の立場を堅持したことについて語った。加藤はしばしば「政治嫌い」だと自らもいうが、実際は政治的関心が高く、政治的関心をもちつづける必要性を訴えた。

ソーニャ・カトーは、家庭内での加藤の行動や態度によって、何を教えられたかを語った。それは冷徹な合理主義者という加藤の評価とはまったく違った、やさしさと愛情にあふれる父親にして教育者であったことを率直に語った。

加藤がカナダのプリティッシュ・コロンビア大学時代に教鞭を執った時代の愛弟子であるソーニャ・アンツェンは、学生に接する教育者加藤について熱く語った。

開設記念講演会に引きつづいて土曜講座を催し、上述の小関研究員の講演と上野千鶴子の「加藤周一 傍観者か、行動者か?」と題した講演がもたれた。上野の講演も戦後思想史のなかに加藤を位置づけようとした試みであった。

第1回加藤周一記念講演会(2016年11月)を開き、樋口陽一が「感じる」と「考えること」と題して、加藤の戦争体験が加藤の思想と行動に与えた意味を論じた。記念講演会は今後も継続する予定である。(敬称略)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

鷲巢力、林達夫の精神史的逍遥(5)、イタリヤ図書、査読無、56号、2017、p.10-17

小関素明、加藤周一の精神史 性愛、詩的言語とデモクラシー、立命館大学人文科学研究所紀要、査読無、111巻、2017、p.127-182

鷲巢力、川口雄一、金子元、山辺春彦、編註：加藤周一書簡 丸山眞男宛 二六点、丸山眞男記念比較思想研究センター報告、査読無、12号、2017、p.31-58

福間良明、「慰霊祭」の言説空間と「広島」：「無難さ」の政治学、査読無、現代思想、44巻15号、2016、p.216-227

鷲巢力、林達夫の精神史的逍遥(4)、イタリヤ図書、査読無、55号、2016、p.2-9

鷲巢力、林達夫の精神史的逍遥(3)、イタリヤ図書、査読無、54号、2016、p.9-15

鷲巢力、林達夫の精神史的逍遥(2)、イタリヤ図書、査読無、53号、2015、p.2-8

鷲巢力、林達夫の精神史的逍遥(1)、イタリヤ図書、査読無、52号、2015、p.2-7

〔図書〕(計5件)

松尾法博、水村暁人、有山輝雄、根津朝彦、鈴木茂、他33名、東京大学出版会、歴史を社会に活かす 楽しむ・学ぶ・伝える・観る、2017、310p (p.223-232)

加藤周一、鷲巢力、夕陽妄語2、筑摩書房、2016、544p (p.522-533)

浪田陽子、柳澤伸司、福間良明、根津朝彦、他10名、ミネルヴァ書房、メディアリテラシーの諸相 表象・システム・ジャーナリズム、2016、380p (p.61-84)

出原政雄、赤澤史朗、平野敬和、根津朝彦、他13名、法律文化社、戦後日本思想と知識人の役割、2015、412p (p.181-204)

赤澤史朗、北河賢三、黒川みどり、根津朝彦、他5名、影書房、戦後知識人と民衆観、2014、373p (p.179-218)

〔学会発表〕(計0件)

〔その他〕

立命館大学平井嘉一郎記念図書館加藤周一文庫

URL <http://www.ritsumeai.ac.jp/library/>

加藤周一文庫ツイッター

URL https://twitter.com/kato_shuichi

加藤周一文庫「青春ノート」

URL <https://trc-adeac.trc.co.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鷲巢力 (Washizu, Tsutomu)
立命館大学・衣笠総合研究機構・教授
研究者番号：30712210

(2) 研究分担者

渡辺 公三 (Watanabe, Kozo)
立命館大学・先端総合学術研究科・教授
研究者番号：70159242

小関 素明 (Ozeki, Motoaki)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：40211825

中川 成美 (Nakagawa, Shigemi)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：70198034

福間 良明 (Fukuma, Yoshiaki)
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：70380144

根津 朝彦 (Nezu, Tomohiko)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：70710044

(3) 連携研究者

なし()

(4) 研究協力者

加國 尚志 (Kakuni, Takashi)
西岡 亜紀 (Nishioka, Aki)
彭 佳紅 (Peng, Jiahong)
ジュリー ブロック (Julie, Brock)
桜井 均 (Sakurai, Hitoshi)
湯浅 俊彦 (Yuasa, Toshihiko)
田中 聡 (Tanaka, Satoshi)
住田 翔子 (Sumida, Shoko)
龍澤 武 (Ryuusawa, Takeshi)
大江 健三郎 (Oe, Kenzaburo)
ソーニャ カトー (Sonja, Kato)
ソーニャ アンツェン (Sonja, Arntzen)
上野 千鶴子 (Ueno, Chizuko)
樋口 陽一 (Higuchi, Youichi)
岩津 航 (Iwazu, Kou)
半田 侑子 (Handa, Yuuko)
猪原 透 (Inohara, Toru)
西澤 忠志 (Nishizawa, Tadashi)
富山 仁貴 (Tomiyama, Noritaka)